

哲學研究

第三百八十六號 第三十三卷
第五冊

歴史哲學の問題

大西友太

私は一昨年五月「眞實の日本」といふ原稿（四百字詰八百枚許）をかねて依頼を受けてゐた笠置書房に渡したが、責任者岩瀬博士といふ者の無責任な行爲によつて八月十日全部盗難にかけられた。雑誌の一原稿位なれば兎に角、まとまつた著述の原稿全部を出版社の責任者の手で盗難にかけられたといふことは前例のないことであらう。訊いて見ると不都合なことばかりである。これでは學者の生命である研究は夙前の燈である。原稿は在職時代の講義の一部をまとめたもので、わが國の發生から神話の生成、その歴史哲學化の必要について述べたものを前半とし、後半では歴史哲學の立場から纏つて神話の重なることが二三を見直した。ここではわが國を歴史哲學上觀想的立場におかず、實踐的立場に進めたのである。こゝに私は今日わが國の再建の根本問題は知られると考へるのである。永い年月の考證的研究と歴史哲學的解釋とによつたものであつて、今これを亡くしては研究のノートは別に取つてないから再生は不可能である。しかしこのまゝ多年研究の結果を闇に葬ることは學者として忍びがたいことであるから、適當の方法で再生することにしたと思ふが、先づ私の取つた歴史哲學上の見解について述べる必要があると思ふから、本稿では左の順序でこれについて述べることにしたい。形式的歴史論理學によつて歴史を論ずるのが私の希望ではない。歴史的事實を離れず、この事實の世界の成立及びその論理的豫想である主觀の問題について考へ、その總合において歴史及びその哲學を見るのが私のこの論文の眼目である。

- 一、ヘーゲル哲學の問題。二、カント哲學の復興。三、カントの先驗統覺と歴史的事實の世界。四、歴史主義と歴史哲學。
 五、歴史哲學の問題（その一）。六、同上（その二）。

一 ヘーゲル哲學の問題

ヘーゲル哲學では有限は無限に止揚せられて永久の眞理となる。人間は神において永久の存在となるのである。しかし哲學の關心はこれよりも深くこの神に止揚せられた人間の在り方が問題であり、有限でありながら無限その物である人間が問題とならねばならぬ。有限はイデアにおいて眞理に達するといふのがヘーゲルにかぎらず一般に思辨哲學者の考へ方である。ヘーゲルはこの考へ方を押しつめて精神的一元論に達するのであるが、これにはなほ考へねばならぬ問題がある。無限は眞理であるが、この眞理が同時に思辨哲學者の考へるやうに有限の眞理であるについては、有限はイデアに止揚せられて眞理であると同時に、イデアその物が有限に内在し、有限その物をもつて無限の眞理とする問題が考へられねばならぬ。ヘーゲルが有限はイデアにおいて眞理に達すると考へ、したがつてその限りにおいて有限の對立は眞理でないと思へるについては、イデアの認識をもつてイデアとエクシステンツとの聯關の認識と間違へてゐるのであつて、イデアにおいて眞理であるよりも以上にエクシステンツにおいて眞理である根本問題がある筈である。最近バルト神學が天國における再生のキリストに對して啓示の問題を改めて深く考へようとするこゝがらはこの場合に深く考へべき問題であつて、哲學はこの啓示の論理的豫想を明かにする點において新らしき大なる課題を與へられてゐるのである。

この課題はヘーゲル哲學ではイデアその物の存在構造の分析から初まる。イデアは一切の有限をそれ自身の中に吞み込んでそれ自身から發展し、同じ有限の存在でありながら單なる有限ではなく、無限その物の内在せる具體的現實の存在となるについては、たゞ有限がイデアの中に消えてイデアの中から生ずると考へるのでは分析が不十分であ

る。イデアの中に消えて新たにそこから生ずるについては消えて生ずるイデアその物の構造について問題が起らねばならぬ。イデアは絶対であるから何物の制約を受けない。たゞ自己制約により自己自身を超越して自己を見る自己否定の眞實の自覺において有限を無限にするのであつて、そこにはイデアが自己の奥底に自己を否定して眞實の自己を發見する點において、自己の無限をも否定する無限の無限において改めて自己を有限に媒介する立場がなければならぬ筈である。有限を無限に呑み込んでそれから無限の有限を作るイデアは、有限を無限に止揚する無限の間をもつと同時に、その無限の空閒にある自己反省の時を超越する高次の無限の空閒をもち、この空閒において自己が自己を見る直覺を認識に發展し、有限を無限にする。イデアにおいて有限の時間が消えて初まるとか、有限がなくなつて無限の有限が初まるとかいふことをたゞ一つの直觀において考へるのでは分析が足らぬ。直觀の背後には直覺があり、その背後にはまた認識の問題がある。イデアそれ自身の自己超越もしくは否定の直觀では、イデアは絶対であるから自己を超越するといふことは無に歸するといふことでなければならぬ。こゝでは直觀といつても最早直觀さるべき何物もない。無が對象である。直觀するものとせられるものが一つである。無の直觀であるからイデアは何物をも見ないところに自己自身を最も完全なる存在において直覺するのである。同時に直觀の直觀としてこの直覺を特殊の直觀に結合するから、この直覺においてはイデアそれ自身の固有の新らしき存在として客觀を見、主觀を見るのである。ヘーゲルのイデアは世界理性であるから、こゝに特殊の有限的事物の存在をもつて世界理性その物となし、その新らしき固有の存在とする。すべてを歴史的事實の世界とするのである。同時にヘーゲルのこの世界理性であるイデアは實在が我において考へるものとしてイデアの自己否定はイデアの即自的絶対を對自的絶対の自覺におき、*an und für sich Sein* と *an und für uns Sein* とするのである。我々自身を唯我的自我論の立場におくのである。勿論かういふイデアの自己否定による自我及び歴史的世界は神が死してその新らしき固有の存在として活きるのであるから、神の唯一の存在である。同時にまたその神を否定された無神論的存在であつて、底知れぬ深き光明を

もつともにもまた同様に底知れぬ深き暗黒に包まれてゐる實存的存在である。この點においてヘーゲルの精神現象學における純粹自己意識及びこの意識と交互律をもつて鳴りながら現はれてくる世界歴史とは本質的に考へ方を進めねばならぬものを生じてくる。自我は唯我的であり、世界はこれに對立する獨立の歴史的事實の世界である。ヘーゲル哲學では精神現象學の自己意識は我々人間の有限的存在の自己意識であると同時に神の自己意識である。唯我論的自我論の自我である。同時にまた宇宙精神である。カント哲學はヘーゲル哲學を通してスピノーザに結合せられ、カントの理性批判において見られる理性の自覺としての自己意識がスピノーザの神に結合せられて神の純粹なる自己意識が人間の自己意識としてその認識の眞理が人間その物を形成することを明かにするのがヘーゲルの精神現象學である。と見られるのであつて、ヘーゲルの精神現象學はその構造を見れば分るやうに絕對精神即ち宇宙のロゴスがその外面的なる方面から内面的なる方面に向つて進み、自覺に達する階段を示す學となつてゐる。しかしたゞ絕對精神とか宇宙のロゴスとかの自覺の學ではない。人間における自覺の學である。人間における最低の階段の精神から最高の階段の精神にいたり、絕對精神その物に達して宇宙のロゴスその物の自覺を見る發達過程の學である。ロゴスその物といふ點においてヘーゲルの哲學體系では論理學に發展してヘーゲル自身スピノーザ學徒となるのである。しかしこのヘーゲルの哲學では實在その物、神その物が論理的體系に發展するについては改めて考ふべき問題がある。即ち神その物が自己否定の無に媒介せられねばならぬことである。そのかぎりヘーゲルの論理學は神の新らしき固有の存在を示す學であり、精神現象學は人間における神の新らしき固有の存在を示す學となる。

ヘーゲル自身では精神現象學から論理學に溯つて絕對精神その物の思惟を考へる場合に、そのロゴス的な故に思惟と實在、思想と事柄とが一致する點において絕對知を考へ、そこに純粹なる發展的自己意識があると考へるのである。しかしこの發展的自己意識といふことはロゴスその物がその即自的絕對から對自的絕對に移るのだけ考へられぬことヘーゲル自身のいふ通りであるにしても、この即自的絕對から對自的絕對に移るといふことはロゴスそれ

自體の自己否定がなければ考へられぬことであつて、こゝにヘーゲル哲學は無の背後に躍進せねばならぬ必要がある。ヘーゲルには精神現象學から論理學に溯つて思惟と實在、思想と事柄との一致するロゴスをもつて發展と考へ純粹なる自己發展的自己意識 *reine sich entwickelnde Selbstbewusstsein* を考へてみるけれども、これは有限から無限への溯源であつて、無限から有限への發展ではない。カント哲學から見るときはヘーゲル哲學は確かに發展に違ひない。有限は認識しえるけれども無限は認識しえぬといはざるをえない批判哲學を無限の認識にまで進めて考へ、無限その物の思惟において認識を考へえる實在哲學にいたつたのであるから確かに發展といへるけれども、この發展は有限から無限への溯源であつて、無限から有限への發展ではない。哲學本來の問題としては無限から有限への發展を明かにして現實具體的に存在の問題を解かねばならぬのであつて、こゝにノエマの側においては歴史的事實の世界を見るとともにノエシスの側において唯我論的に純粹自己意識の問題を生じ、したがつてその根源においてこの兩契機の關係において歴史哲學本來の問題を解決せねばならぬやうになるから、ヘーゲル哲學を出發點としてまつたく新らしき哲學を見ねばならぬやうになる。カント哲學はヘーゲル哲學にいたつて歴史的となり歴史哲學となつたけれども、眞の歴史哲學はこのヘーゲルを突破してその背後に出るときに見る外はないのである。

カント哲學は物自體の問題を見れば明かであるやうに有限は認識されるから認識されぬといふパラドックスに陥つてゐるのに對してヘーゲル哲學はこれを解決し、無限は認識されぬから認識されるといふパラドックスを新たに提出するのであるが、この無限が認識されるといふことはすべてをイデアに止揚してその同一性において認識するといふことよりも深く、無限その物を有限的特殊の存在として見るといふ點でヘーゲルよりも深く進み、イデアの自己超越の否定において新らしき哲學的認識を考へねばならぬ必要があるのである。ヘーゲルのイデアが一步深く背後に進まねばならぬ問題のあることは忘るべからざるところであつて、純粹自己意識はヘーゲルのそれよりも深くなるとともに發達の概念を明かにし、これと對立せる世界歴史の歴史的事實もまた改まるから、その總合としての歴史哲學の問

題が新たに提起せられ、歴史哲學の問題をまつたく新らしくする。殊に今日のこの新らしき歴史哲學は本體論的に深くは入るとともに科學的現實的論理として現實具體的な事柄を取り扱ふ歴史哲學でなければならぬ點において一層その形態を新らしくせねばならぬ。哲學の最も根本的な問題として我々はカントからヘーゲルに進むとともにそのヘーゲルをまた突破せねばならぬ必要がある。ヘーゲル哲學はイデアの即自的絶對から對自的絶對の自覺となる點において深き問題をもち、この問題を解決する點においてイデアの自己否定の無を媒介にしてその立場を深くする外はない。この點について考へぬからヘーゲル哲學は神祕的超越的となり、精神的一元論の辯論的形而上學に溯源するのみとなる。我々はイデアの否定について考へヘーゲルの精神現象學よりも深く唯我論的自我的純粹自己意識を見るとともにこれと交互律をもつて鳴るといはれる世界歴史を見、その自己否定の相互媒介により、即ち世界歴史の問題は自我論の理性・概念・精神・範疇に媒介して理解し、またこの範疇は世界歴史に媒介して理解するところに眞のヘーゲルの哲學を求め、その中心である歴史哲學を解決する外ないのである。

ヘーゲル哲學の問題は一口にいへばイデアそれ自體の自己否定の無に媒介するにある。私はこの點についてやゝ突飛のやうで詩のやうに見えるかも知らぬけれどもエクハルトの無の神祕哲學について一應考へて見たい。エクハルトの神祕哲學は近世のスピノーザ哲學に發展し、ライプニッツ哲學に發展したことは隠れない事實であつて、カント哲學をスピノーザ哲學に結合したヘーゲル哲學はその歴史的世界においてまたライプニッツの大なる影響を受けてゐることは人の知る通りである。そのかぎりヘーゲル哲學がスピノーザ及びライプニッツ哲學を大なる體系に發展してゐる背後にエクハルトの神祕哲學に向つて大なる論理的發展をする必要のあることは忘るべからざる事實であるといつてよい。エクハルトは中世の神祕哲學を大成したマイステルであつてヘーゲルはカント哲學を承けて一應これを大成せる哲學者であるからその間には中世と近世との著しき違ひはあるけれども、エクハルトが人間が一切を無にして神のところに至らねばならぬと説く點をヘーゲルはイデアへの止揚で考へてゐるといへるのであつて、ヘーゲル哲學の

體系にはエクハルトの思想が深く影響するとともに、エクハルトはヘーゲルによつて深くその思想を論理的に發展せらるべきであると考へられるのであるが、エクハルトの無の思想にはヘーゲルのイデアへの止揚を考へしめるとともにイデアその物の自己否定による人間への發展を考へしめるものがある點で、私は特にエクハルトに注意したいのである。先づエクハルトの球及びこの球によつて象徴される人間について一應考へて見たい。ヘーゲルのイデアは無に媒介して深く考へられねばならぬが、エクハルトは人間の自己否定の無については深く考へてゐる。我々人間がすべての意味で自己を否定する無において永遠に達するといふことは、ヘーゲルの哲學において深く論理的に考へるべき所であるが、エクハルトは深き信仰によつて何處までも己を空くする態度で神に没入し、神の深き啓示をえたる高貴の心臓をもてる人間となるべきことを説教する點で、神祕哲學的ではあるがヘーゲルよりも深くそのイデアの自己否定を示唆するものがあると思はれる。エクハルトの神祕においては人間の自己否定が同時に神の自己否定として人間が神と一體となり、神それ自體の自己否定によつて人間その物を永遠者とするものあるを思はせる點がある。勿論エクハルトはこのことを論理的に明かにしてゐるのではない。人間が一切をすて、己を空くする點で神にいたるときは神の啓示がえられると考へるのであるからそのかぎりでは超越的神祕的であつて、中世の神祕哲學を大成したといふこと以上には言はれぬのであるけれども、その神祕には尋常の神祕とは異なれるものがあると私は思ふのである。先づエクハルトの球がヘーゲル哲學のイデアの自己否定において見る歴史の初めをなす問題を最もよく示すものがあること柄から考へてゆきたい。エクハルトの球は到る處に中心をもつ周邊なき無限大の球である。エクハルトによるときは神はモナードである。またかういふ球といつてもよいといふことである。(ein Kugel) 到るところに中心があるといふのは到るところに單子があるといつてよいといふことであらう。單子はすべてのものがそれから出ていつてそれへ返るものである。すべての有限を呑み込んでまたそれを吐きだすものであるが、呑み込んで吐きだすといふことは私のすでに述べたやうに有限を呑み込んでこれを有限の無限として吐きだすといふことではなければならぬのであ

るから、異なる層において行はれる作用でなければならぬ。人間が自己否定の無によつて神にいたり、神の深き啓示を受けてホモ・ボースス、ホモ・ノビリスとなるべきことを高調するエクハルトはこのことを知つてゐる筈である。我々人間から見るときはこの球の中心は一切の有限を無限に止揚する點であるけれども、神から見るときはこれを無限の有限として發展する點である。神が人間に發展する點である。神の象徴 *Simbild Gottes* である。

エクハルトはこの球を神といつてよいと考へてゐる。後にパスカルによつて深く哲學的に考へられてゆく。彼は人の知る通り數學家設法家である。この球は單子の世界として神であると、もにまたその象徴である。人間の形像を示すものである。私はこの論文では主としてこの後の方面から考へてゆきたい。神の即自的絶對の自己否定において見る對自的である自己意識は神の弱められた存在ではなく、その斬らしき固有の存在であつて、人間はこの自己意識におかれたるものとしてその自己意識のすべての點は歴史的な點となりえるのであることをこの球及びその點は最もよく物語つてゐる。ヘーゲルの精神現象學の自己意識をこの球に映して見るとき世界歴史を最もよく反映する。ヘーゲルはエクハルトに溯るときスピノーザに溯るよりもよくその哲學の中心である歴史哲學を明かにしえるものと思ふ。

ヘーゲル哲學で初めに書かれた傑作は精神現象學であつて、この書ではすでに述べた如く感性的人間の反省から絶對精神にまで進み、宇宙のロゴスにまで進んで眞の純粹自己意識において人間を見るやうになつてゐるから、自然ヘーゲル哲學ではこの現象學から論理學に進み、論理學から自然哲學精神哲學に發展してその體系を作つてゐる。最初の計劃は精神現象學をもつて第一部とし、論理學、自然哲學、精神哲學を第二部とするにあつたから、精神現象學の體系における位置は最初の計劃とはやゝ異なつてきたことは事實であるけれども、その重要性には變りないのであつて、一般に人間の精神的に發展する階段を示したものととしてヘーゲルの筆の偉大さと透徹さとを示してゐる。ヘーゲルがこの精神現象學とこれに續く哲學において明かにした神においてある人間の偉大さを論理的に示す點にいたつてはエクハルトが神祕的體驗の説教において説くものとは到底同日の斷でないのであつて、これを廣大なる論理的體

系に開展してゐる。しかしその深さから見るときはエクハルトがその神祕的體驗において示すところの神においてある人間には、神に止揚せられたヘーゲルの人間に神が啓示するものあるを示す點において、再生のキリストに神の啓示することを考へるバルト神學の深さを思はせるものがあるのであつて、私はヘーゲルが精神的一元論の形而上學で陥れるスピノーザ的靜學的缺點はすべてこの點から考へ直して往くべき可能性が見られるものと考へエクハルトが深き信仰をもつて神に仕へる自己否定に期待しえることが多いと思ふ。

エクハルトの自己否定の死もしくは無にあたる原語は *Abgeschiedenheit* である。西谷博士はこれを離脱と譯されてゐる。私はこれにしたがつてよいのであるが、多少の理窟かも知れぬけれども私は死または無と意譯したいと思ふ。この語には離れるとか孤獨とか死または無とかいふ意味がある。エクハルトはこれ等の意味でこの語を使つたのであると思ふが、死が離れる意味も孤獨の意味も持ちながら最もよくこれを宗教的に徹底し、啓示恩寵の宗教的意味を明かにして歴史の根本問題を解決するのではないかと考へ、私は死または無と譯することにした。死または無といふことは佛教哲學の固有の概念になつてゐる。佛教では死または無を方法とし、究竟とし、有限の人間がそのまゝ無限である煩惱菩提をこれによつて明かにすることは人の知る通りである。我々東洋人には死もしくは無を通して西洋哲學と佛教哲學とを論理的に結合し、したがつて永き傳統の教養によつて西洋哲學及びキリスト教を理解することができ、佛教その物をまつたく刷新しえる大なる利益がある。エクハルトのこの *Abgeschiedenheit* といふのは *sich vernichtet, sich zu Grunde gelassen hat* といふことであり、*mit tiefer Gelassenheit entsinken* といふことを意味する。佛教の死もしくは無によつて再生することを意味するものといへるであらう。ヘーゲル哲學はエクハルトの神祕哲學によつて深くなるとともに、佛教の本來的なる無によつて言ふべからざる深さに達するといへるであらう。しかしかう考へるとエクハルトはプロテスマスなどと同じやうに流出説を信じ、すべてのものは神から出るが、神その物は永久に變りないと考へ、したがつてその限りすべての物は神の弱められたる存在であるとする思想と矛盾す

る。エクハルトは人間の深き自己否定によつて他の人では見られない神人一如の境位に立つて人間が神にいたり、神が人間に啓示することを身に滲みて感ずるをえなければも傳統のキリスト教の有神論の思想を脱すること能はぬから自然このやうになつてゐるのであると見る外ない。すべての意味で傳統を脱してこれを新たにするといふことは容易でない。敬虔なるだけにエクハルトは自己否定の無もしくは死の思想を徹底して傳統の有神論の思想を論理的に否定して終つてその背後に神の新らしき固有の存在を見るといふまでにいたることは困難であつたと思はれぬではない。神祕家といはれざるをえなかつたのである。エクハルトは神と人間とを嚴格に區別するとともに神においてある人間を明かにし、神の自己意識につゝまれた人間を明かにするに力を注いだのであるけれども神の自己意識もエクハルトではまだ直觀で見える外なかつたから自然神祕的超越的に觀想する態度を脱せないものゝあることは已むをえぬところであつて、その結果エクハルトは靜學的安住的であつたことを否定されぬ。流出説においても宇宙神學は考へられぬではなく、人間を神の子であると考へられぬではないけれども、神及び信仰の意味は地上生活の人類の歴史の上に實現されてこぬ。我々人間の地上生活は神の新らしき固有の存在であつて、我々は神の國をこの地上生に實現せねばならぬ使命をもつてゐるといふことが徹底せぬ。また同時にこの新らしき固有の存在を否定された無神論的存在であるから二つの矛盾契機の下に奮闘せねばならぬといふことが徹底せぬ。神學の上から見ても、またその論理的豫想の上に立つ哲學から見ても徹底せねば、この二つの矛盾的性格を同時に持つ實存的人間の實踐的努力が本來的に湧いてこぬ。エクハルト自身は深き信仰に活き、神においてある人間として神それ自身の深き自己意識につゝまれた人間生活の榮光に感激し、神の人格的存在に感激してゐたから何等の弊害はなかつたけれども、後世のありふれた神祕神學者もしくは信仰者といはれるものになるときはその弊害は随分多いのであつて、信仰及び教會に逃避するのみであつて、その信仰は不熱心なものとなり、教會は超越的なものとなるから、宗教の歴史的意義はないものとならざるをえぬ。ルーテルの宗教改革は已むを得なかつたのである。

今日我々の手に傳へられたエクハルトの書は彼自身の筆を執つたものではない。彼の説教を聞いたものが記録に留めたものを集めたのであるから精確なエクハルトの哲學を知るには色々の考證的研究を要する。孔子の論語など、同じやうに精確な考證的研究をつまぬときは眞實は分らぬ。私はこの護法家の書について一々考證的研究をつんだ譯ではない。主としてベルンハルトの「中世の哲學的神祕」によつたのみである。したがつて強いてといふ譯ではないけれども、その中にあるエクハルトの眞の言葉と思はれるものから考へて大體以上のことは言ひえると考へる。アウグスティンでは神は無から世界を作つたけれども、これは神以外には世界定立の條件はないといふのであつて、神その物は絶對有であるといふ思想である。したがつて絶對超越の神祕説になるのは當然であるが、このやうな超越的絶對の神それ自體が世界を創造するについては、神は何物の制約にもよらず、たゞ自己自身の制約によつて自己を超越して自己を否定する自己認識が根本問題とならねばならぬのであるから、アウグスティンの説はエクハルトの無もしくは死の思想を通して發展し、神それ自體の自己否定によつて神の新らしき固有の存在として人間を見るにいたらねばならぬ。死したものが無限の神の榮光に浴するといふことは、人間の死とゞもに神それ自身の死によらねば見られぬことである。子は親に對しては一切を忘れて仕へねばならぬとゞもに親もまた一切を忘れて子を育まねばならぬ。こゝに初めて親子の人倫がある。神と人間についても同様のことが考へられる。エクハルトは屢々無について説教し、人間は自分自身からも一切の事物からも無にならねばならぬ。無になつて神から作られねばならぬ。神が我々の靈に與へる偉大なる高貴なるものをえねばならぬといつてゐる。この無において神から作られるといふことは私のこの論文で問題としてゐるところである。ヘーゲル哲學もこの點から新らしく出發せねばならぬ。神それ自體が死して一切が活きる問題について考へ、一切の生命を通して神がその即自的絶對から對自的絶對をへていよゝ眞の具體的なる自覺を地上生活の人間に實現する問題があるのである。ヘーゲルのイデアにおいて有限が無限となるときは有限はすべて自己を否定するのである。我々人間は第一身體がなくならねばならぬ。聞くべき耳もなく、見るべき眼もなくならぬ

ばならぬ。自然からも社會からも離れて終ふのである。絶對に孤獨になるのである。人種の區別もない。たゞ世界的な人間となるのである。このときの人間は勿論その有限的精神を棄てねばならぬ。聊かの良心をもすてねばならぬ。このとき人間は初めてその罪を赦されて天國にゆける。この天國において改めて神の啓示を受けねばならぬ。ヘーゲル哲學は論理的にはこゝにその思辨的論理のイデアの直覺に對する認識論の問題をもつてゐることはすでに注意した。次節以下で論ずる如くイデアの自己否定を媒介にして大なる問題を起こするのであつて、直覺において見るイデアの絶對的眞理に關する我々人間の知識が明かにされねばならぬ點に問題がある。論理はないけれどもエクハルトのやうな護法家が己を空して神に仕へる自己否定の無の中には神と人間との關係について深く考へしめる眞理があるのであつて、何人でも純粹に己を空くして神に仕へることを知るものに對しては神はまた己を空くする自己否定によつて眞實の自己をその人に啓示する。人間が神にいたるには死なねばならぬ如く神が人間に啓示するには又自己否定によつて死なねばならない。神は自己否定の無を媒介して最も完全なる自己を直覺するところに人間を最も完全なる永遠の状態において造り、空に歸せる人間の靈に最も完全なる神を自體を啓示するのである。罪も社の罪となり、高貴の心をもつて善に勵む人間となるのである。恩寵榮光に輝いてくる。しかも人間から神に祈るときはこの恩寵はたゞその人へのみかぎられるのであるが、神から人間に與へられるときはその恩寵は人間一般に與へられる。求める恩寵よりも與へられる恩寵は大である。神は己をすて、祈る人間を孤獨に置かぬ。その人間においてはすべての人類を生れ變らしめてアダムの人種を天國の新人種となし、まつたく地上生活を一新する。

しかしかういふ新人種の間も神の新らしき固有の存在であると同時にこれを否定されてゐるから福音淨福とともに罪惡の種を興へられ、その矛盾的存在の下に奮闘せねばならぬ。まつたく實存的存在である。エクハルトの神の象徴である人間は最もよくこれを示してゐる。何處までも深く自己否定に進んでゆくエクハルトの人間は神の世界にいたるといふよりも以上に神の世界で神の啓示をえて恩寵を受けるといふ點でたゞその人のみでなく、社會全體がかう

いふ社會であることを示してくる。エクハルトが人類救済のために努力したのはかういふ社會を實現せんためである。彼においては死といふことは第一罪惡の種である身體を無くせよといふことである。また罪惡に對立する人間の道徳から死せよといふことである。人間は一切を無くする死によつて初めて天の國にいたり、神の啓示をえて新らしき人間として一切をえる。無くした身體をえ、知識道徳を新たに神聖なものとして永久にえられるのである。文字通りに全く比較すべからざる光明においてえられる。深き信仰に入つてこの法味をえる者は貴い人間である。エクハルトは傳統の發出説を信ずるのであるから、そのかぎりでは神の國は絶對であつて人間の國は絶對でない。しかしその敬虔なる信仰においては一切の己を捨て、謙虛の心をもつて神を信仰するのであつて、自分の身の廻りに神の存在することを證かしえた護法家であるから、そのかぎりにおいては正しくこのやうな世界をもちえた人であるといへる。ヘーゲルはエクハルトの神の國にいたれる境位を明かにする哲學はもつけれども、この國で再生せる人間に神の啓示する神學的現實の哲學はもつてゐぬ。したがつて歴史の根本的範疇である個性及びその發達なる概念は實はもつてゐぬのである。

この點ではエクハルトの體驗の方が歴史哲學的には深き生命をもつといへる。エクハルトはこのことを論理的に明かにしてゐるのではない。その深き信仰においてこゝに達し、そのかぎりその信仰は最も深き歴史の意味をもつてゐる點でははれることである。ヘーゲル哲學にいたつてカント哲學が歴史哲學となり、歴史問題を中心とするやうになつたことは事實であるけれども、イデアに止揚せる立場を考へるのみであつて、イデアの自己否定による超越的内在について考へぬ。そのかぎりヘーゲル哲學ではすでに述べたやうに歴史及び歴史哲學の根本的範疇である個性及び發達の概念をもつこと能はぬ。こゝにヘーゲルの根本的缺點がある。人のよく知る如くヘーゲル哲學では神の即自的絶對が對自的絶對となり、神それ自體の純粹自己意識を見るときといふことはその中心的思想であるといつてよいのであつて、こゝにヘーゲルは神の純粹自己意識の自覺において一切の根本問題を考へるのであるけれども、その純粹自覺は

人間から神への向上の自覺であつて、神から人間への發展の自覺ではない。我々人間が神の絶對に歸したときの問題であつて、神の絶對が我々人間に發展してくるべき問題ではない。この問題は神が歴史の時間を消してこれを生ずる自己否定の立場に進まぬときは考へられぬことである。ヘーゲルの哲學にはまだ發達の概念はない。ヘーゲル自身は發達といふ語を好んで使つてゐる。reine sich entwickelnde Selbstbewusstsein といふ語はヘーゲル哲學の最高峰では必ず現はれてくる語である。しかしこれは正直にいふときはヘーゲルでは人間の奥底において人間の歴史を消した神それ自體の世界において見られる歴史であつて、神が人間の歴史の時間を生ずる發展の起點をばまだ見てゐぬのである。この起點は歴史の時間が消えて生ずる點としてすでに述べたやうに有限を無限のイデアに止揚する立場ではなく、この立場の背後にあつて無限のイデアを有限の人間に限定し發展する立場である。イデア的直觀に對する直觀とし、直觀の直觀としての直覺にたいする認識において見られるところである。またそれであるからヘーゲルの純粹自己意識は絶對的に自明性をもつ自己意識であるとともに、人間の自己意識としてその自己形成の根本原理であり、發達の根本原理であることがいはれるのである。歴史及びその根本的範疇である發達の概念が見られるのである。この發達の概念において個性といふことが同時に考へられる。ヘーゲル哲學の發達の頂點にあるロゴスの同一性には個性はない。ヘーゲルがイデアにおいて有限は無限の永久眞理となると考へるのは思辨的である。シェリングの同一哲學と同じ立場においてある。理智的直觀の同一哲學においてあるが、この同一的根據の背後には絶對的差異性の存在がなければならぬ。ヘーゲルの哲學ではロゴスは何處までも一般者であり、絶對精神は一般普遍者である。個性ではない。個性はこの一般者を否定せるものである。しかし絶對であるから他からこれを否定するといふことは許されぬ。何處までも自己自身の自由による自己否定でなければならぬ。ヘーゲル哲學の一般者は自己を超越して自己を見、自己の新らしき固有の存在を見るところにその直觀が特殊の直觀の直觀としてこれに全體の根據を與へ、人間の經驗の絶對的個性的根據となるのである。個性は全體者が自己否定によつて新らしき固有の存在となる具

體的者である。

かういふ點でヘーゲルの哲學は根本的にその考へ方を進めねばならぬ問題があるのであつて、ヘーゲルはカントをスピノーザに結合して精神的一元論を建てゝゐるけれども、その一元論は自然と精神との同一化された靜學的一元論であつて歴史の根本問題を解決すべき動學的性格はもつてゐぬ。個性及びその發達なる歴史哲學の根本的概念はもつてゐぬのである。範疇はない。ヘーゲル哲學はカント哲學を歴史哲學に導いたといふけれども、歴史的世界の入口にまで導いたといふのみであつて、その中には入つて眞に歴史の問題を考ふべき立場には達してゐぬ。ヘーゲル自身は自己意識の本來的なる深さにおいて哲學的認識の根據を明かにするといつてゐるけれども、その自己意識は眞の自己及び個性の問題を考へ、その發達の歴史を考へる深さに達してゐぬ。この思辨的なる缺點はフッサールの哲學においても同様に見るところであると思ふ。フッサールの形相的個別體は個體概念を示すものではなく、歴史の個性を示すものではない。一切の時間及び變化を取り除ける先驗的超越的本質である。私はこゝで詳細の説明をすることはできぬ。後の機會をまつ外ないけれども、氏の先驗的還元では一般者普遍者の領域を開拓するのみであるから特殊の歴史の時間を消して一般者普遍者の領域に進んでゆくけれども、この消した時間を再び生じて普遍者一般者の内在する現實的具體者として特殊を見るについては、その一般者普遍者の自己否定による超越的内在をまたねばならぬ。先驗的還元で形相的個別體を見ようとするのはフッサールの根本的誤謬でなければならぬ。哲學者によつてはこの場合に内在的超越と超越的内在とは同一であるからフッサールの先驗的還元でえられる立場は超越であると同時に内在であるから私の批評はあたらぬといふものはあるかも知れぬ。しかしこの場合の超越と内在については私の最初に述べたヘーゲルのイデアに對する批評で明かであるやうにまつたく哲學の領域を異にして考へねばならぬ問題であつて、ヘーゲルのイデア的直觀の現在と、この直觀の直觀としての現在との違ひがある。イデアの自己否定による超越においてまつたく思辨的領域を越えた問題となつてゐるのである。フッサールはこの區別を明かにせず、たゞ思辨的に考へ

るからノエマとノエシスとは巧妙な方法によつて統一せられてゐると考へてゐるけれども、イデアの自己否定によるかぎりノエシスもノエマもその新らしき固有の存在でなければならぬのであるからこの兩者は主體と客體との異なる領域における獨立の存在でなければならぬのであつて、それ／＼その立場の絶對を守りながら自己否定的に相互媒介をするところに統一を求める外ないのである。本質直観に對する認識が根本問題とならねばならぬ。フッサールの考へる形相的個別體は實は思辨的論理の同一哲學の即自的絶對であるにすぎぬ。ヘーゲルのイデアと同じやうにその直覺に對する認識の問題を遺すのである。フッサール自身はカントをもつてなほ心理主義を脱せぬといふけれども氏自身心理主義に止つてゐる。ヘーゲルのイデアの自己否定による超越的内在の新らしき固有の存在を考へねばならぬのと同じやうに、フッサール自身そのイデアの自己否定によつて考へねばならぬのであつて、このとき唯我論的自我と物自體的存在の歴史的事實世界とを見るをえ、歴史の根本的範疇である個性及び發達の概念をえられる。フッサールの形相的個別體は我々人間の個性を根本的に示す存在を示すものとも考へることが許されるのである。我々自身人間としてその純粹自己意識において神の自覺を見ると、ともに歴史の根本的事實の世界を見ることができ、したがつてその相互媒介による辯證法的統一において眞の歴史及びその哲學を見ることができ、ヘーゲル哲學はこの二つの世界即ち唯我論的自我と歴史的事實の世界との辯證法的統一として考へ直される歴史哲學でなければならぬ。精神現象學と世界歴史とはヘーゲルの哲學においては常に表裏してゐるといはれるのはこの二つの契機はもと／＼辯證法的であつて、相互媒介によらねば存在すること能はざる絶對であるからである。

この點は最も注意すべき歴史哲學上のこと柄である。ヘーゲル哲學は辯證法の先天性による構成であるといはれてゐるけれども、その先天性は實は思辨的であつて辯證法的ではない。有限を無限に止揚せる直観の立場で考へられてゐるのみであるから構成といつてもなほ抽象的であるを免れぬ。嚴密な意味では問題は寧ろその背後にある。有限の人間を無限に止揚する立場で考へるのであるから、有限の人間のもつ歴史の經驗的材料を先天的に整理することはで

きる。そのかぎりでは思辨的にヘーゲル哲學は大なる業績をもつといへるであらう。カントが時間空間及び範疇の先天性によつて經驗の材料を整理して自然の認識としたやうに、ヘーゲルは經驗的歴史の材料を思辨的に整理し、人間の歴史を神の歴史にまで根源せしめて神の純粹自己意識の運動として明かにした。そのかぎりヘーゲルの歴史哲學は人間の歴史を神の絶対精神の一元論的本體論的に一大體系に發展したといふことはできるであらう。しかしヘーゲルの辯證法からは何等の歴史的事實を導來することができない。歴史的事實を生成する辯證法ではないのである。我々人間の歴史的事實を先天的に形成する立場に達せる辯證法として哲學的にこの事實を生じながらこれを統一する意味の辯證法ではない。歴史的事實の世界及びその主體的豫想としての認識の辯證法ではないのである。この點については讀者は私が前にヘーゲルの歴史哲學には發展の概念がない、神への溯源があるのみであつて、神から人間への發展の根本概念はないと述べた點を想起せられんことを希望する。すでに述べたやうにヘーゲル哲學では精神現象學から論理學に進んで絶対精神その物の思惟を考へるときにそのロゴス的である點において思惟と實在、思想と事柄とが一致する點において絶対知を考へ、その純粹なる自己構成の發展的自己意識をもつて哲學の中心問題としたのであるから、そのかぎりヘーゲル哲學の中心問題は正しく歴史的事實であつて發展といふことが根本概念となつてゐると考へられるのは無理ないことであるかも知らぬ。しかしこれは人間から神への溯源の生命においていはれることであつて、人間の有限的經驗的歴史を神の無限的永久的歴史に止揚せる同一性において言ふのであるから、人間の歴史の神においてある神聖さをいふものに過ぎぬ。この神聖なる神においてある人間の歴史が如何にして地上生活に發展するかの問題は考へてない。これについてはすでに私の詳しく述べたやうにヘーゲルの哲學はその中心問題である純粹なる自己發展的自己意識についてなほ深く考へねばならぬのである。絶対精神その物がその即自的絶対から對自的絕對に轉廻する場合の自己否定の問題について考へねばならぬのであつて、こゝに初めて歴史的事實の辯證法的先天性

による構成といふことが考へられ、純粹なる自己意識による總合的統一といふことが成立して我々は歴史的世界及びその哲學をもつことができるのである。認識の問題を徹底するところに見られる純粹哲學が歴史哲學であらねばならぬことを知り、カント哲學の徹底において歴史哲學を知るのである。カントの復興はこゝにある。

私は本節ではたゞ問題を提出するのみである。その詳しい説明は次節以下にゆづる外ないが、ヘーゲル哲學がイデアの直覺から認識に進んで考へねばならぬ點から見ると歴史哲學で溯源即發展・發展即溯源といふやうなことにはなほ深く考へねばならぬ問題がある。有限の人間を無限の神に止揚するヘーゲルのイデアの直觀における現在ではなく、この直觀の直觀において見る現在の現在において我々人間の眞の歴史は初まるのであつて、歴史は天國に復活せるキリストに初まるのではなく、このキリストに啓示する神に初まるのである。こゝにすべての過去の歴史を消して未來の歴史を作る現在があるのであつて、この現在においてすべての歴史は統一せられ、その文化は總合せられるのであるから、トレルチなどの歴史哲學の根本命題である現在の文化總合といふこともなほ深く考へられるものでなければならぬ。今日歴史哲學的に現在の文化總合といふときは何人もトレルチのそれを思ひ出すであらう。トレルチはヘーゲルの辯證法とコントの社會發達の法則とを結合するところに歴史哲學の動學的法則を發見しようとするのであつて、コントに結合しようとするだけにヘーゲルの辯證法については深く研究してゐる。私は氏の研究には十分學ばねばならぬものがあるを知るのであるけれども、私はヘーゲルの辯證法については以上述べてきた點では根本的に氏と異なる意見をもつものであるから氏の現在の文化總合に對しては根本において一致することの出来ない意見のあることはこゝに斷つておかねばならぬ。詳細な説明は後に歴史主義及び歴史哲學の問題について述べるときに譲る外ないけれども、私はヘーゲルの哲學をその根本概念において突破してその背後に出るときに氏の歴史的事實の世界とその主體的豫想である自己意識の自我が見られ、その相互媒介の辯證法的總合において歴史哲學が成立するのであると

考へねばならぬと思ふ。私はこゝにまたすでに述べたやうなヘーゲルの本體論的論理の歴史哲學が近代の科學的現實的論理の歴史哲學となりうべき根本的可能性が見られる點に注意したのである。ヘーゲルのやうな歴史哲學は本體論的論理の歴史哲學として古代型に屬する。これを近代型の科學的現實的論理の歴史哲學とするについてはトレルチはその著「歴史主義及びその問題」において大なる努力をつみ、功績を重ねてゐる。我々はこれに學ばねばならぬと思ふのであるけれども、ヘーゲルの本體論的論理の精神的・一元論が科學的現實的論理の歴史哲學に發展するについては根本においてヘーゲル哲學のイデアの自己否定が注意され、この否定において歴史の根本的事實が見られると、もにまたその否定である反對の事實が見られ、唯物辯證法的歴史の現實が見られることを知らねばならぬのである。ヘーゲル哲學ではイデアをその背後に否定する無の立場において眞の歴史を見ると、もにマルクスを見るべき科學的現實があるのである。我々はヘーゲルがその精神現象學においてもまた世界歴史においても最高原理とする精神その物の純粹自覺を見るについては、ヘーゲルの精神その物の運動を永遠に止揚せる立場において、即ち永遠の永遠において精神それ自體の自己否定を見、絶對無に媒介する故に精神それ自體が最も完全に自己を直覺する立場をもたねばならぬのであつて、この直覺において見る絶對的眞理を進んでこの眞理の絶對性に關する我々自身の絶對的知識とするときにヘーゲルのイデアの即自的對自的自覺實在が我々自身の實在となる認識に哲學の根本問題がある。こゝにヘーゲル哲學はマルクス哲學と科學的現實的論理において關聯する。マルクスはこの點から見ねばならぬ。

我々人間の求める永遠と神の與へる永遠とはこの違ひがある。この意味でヘーゲルの思辨をその背後に向つて徹底し、イデアの自己否定において見られる世界歴史は神の榮光に輝くのである。しかしこの榮光に輝く世界は神の自己否定によるものであるから同時に一切の榮光を奪はれたる闇黒の世界である。神が一切の自己を否定して自己の奥底に見る世界であるから眞實の自己を見る神の世界であるとともに神の世界でないのである。忽然發起、名爲無明と

いふより外に言ひやうのない世界である。ヘーゲルの神の世界歴史は絶對光明の世界であると同時にマルクスによつて否定された唯物論的世界でなければならぬ。唯物辯證法に媒介されねばならぬ世界である。ヘーゲル哲學は本體論的論理の精神的一元論の形而上學であるが、かういふ意味でその一元論の形而上學的歴史哲學の世界はマルクスを媒介にして科學的現實的論理の歴史哲學に發展せねばならぬ問題をその内面にもつてゐる。ヘーゲルの世界歴史はマルクスの唯物辯證法を媒介にして本來の自覺に返り、神その物の固有の新しき存在の世界歴史に返るほかない。したがつて正常なるマルクスは今日或る人々の濫用するやうなものではない。マルクスの辯證法の世界は神その物の自己否定として見られるものであるから神がないとともに神の新らしき固有の存在である。唯物辯證法の物は物であると同時に神である。ヘーゲルからいへば精神その物である。世界歴史はこの矛盾的性格の實存的存在である。マルクスの闘争を見る場面がある。マルクスがヘーゲルの世界歴史を否定して唯物辯證法哲學を創めたといふことは理由あることであつて、イデアもしくは世界理性の自己否定はマルクスの一面をもたねばならぬのである。しかしまたこれと同時にこれを否定する場面をもち、神の新らしき固有の存在としてその歴史を完成せねばならぬ積極面をもつてゐることは忘るべからざるところであつて、マルクスの唯物辯證法的否定面をもつといふことは元來は科學の力にまたねばならぬ社會の合理的改革を通してイデアの自己否定による世界歴史を積極的に實現せねばならぬといふ根本的要求に外ならぬのである。ヘーゲルの精神的一元論としての本體論的論理の歴史哲學が科學的現實的論理の歴史哲學となるところにマルクスが存在する。現代はこの論理の歴史哲學時代であること言ふまでもない。マルクスの問題は主として社會學の問題である。しかしその本質においては最も深き關心の哲學問題でなければならぬのであつて、歴史哲學上歴史的世界の根本事實として深く解決する必要がある。社會進歩のコント的法則としてマルクス主義の闘争を見、科學的改革を強力に遂行するとともに、その本來の目的を失はずいよくこれを明かにする歴史哲學の課題があるの

である。かういふ意味では私はヘーゲルのイデアの自己否定を媒介にしてヘーゲル哲學それ自體を深く考へ直すとも歴史哲學の問題を新らしくする點においてトレルチの歴史哲學にもなほ考へねばならぬ問題を有するものと思ふが、その詳細なことは五節六節において述べるつもりである。

さて私は以上極く簡單であるがヘーゲル哲學の問題について考へて見た。以上述べたところはたゞ問題を提出せるのみである。しかもこの問題もたゞその真なるもの一二を拾うたのみである。詳細な説明は後にゆづる外ない。以上述べたところではヘーゲルのイデアの自己否定を媒介にして直覺から認識に進み、直覺の絶對的眞理の絶對的知識をえねばならぬところに眞の哲學と歴史との問題があるといふのを要點とする。以上述べたところは簡單である。しかしこれだけのことが分れば歴史哲學の問題が何處にあるか自ら明かである。對象の側において如何なる問題があるか。またその主觀的豫想の側において如何なる問題があるか。この兩者の關係において如何なる問題があるか。自ら明かなるものがあると思ふ。ヘーゲルはイデアの辯證法によつて直覺の絶對的眞理に關する絶對的知識を明かにせんとしたけれども、その辯證法はヘーゲル自身の高調してゐる通りにイデアの即自的對自的自覺實在としての絶對的眞理を明かにしたのみであつて、それ以上にその絶對的眞理が我々自身の絶對的知識であることを明かにし、*an und für sich Sein* であることを明かにしたのではない。ここにヘーゲル哲學の最大の缺點があり、往きづまりがある。ヘーゲルはイデアの辯證法的哲學においてカント哲學を歴史中心主義としたといふことはこれまで哲學界では一般に認めてきたところであつて、史家ウキンデルバンドなどもこれを高調してゐるけれども、嚴密な意味ではその辯證法は歴史哲學の領域の問題となつてゐない。こゝに我々の深く注意すべき哲學の問題がある。カントが現代に復興せねばならぬといふのはこの問題を解決する鍵がその哲學の中に最も有力に藏せられてゐるからである。カント哲學の復興はヘーゲル哲學に發展せねばならなかつた意味の哲學においてではなく、反對にヘーゲル哲學の根本的缺點を救ふべき

鍵をカント自身もつてゐるからである。したがつてそのかぎりヘーゲルはカント哲學の重要な問題を省みてゐないから、今日我々はそれを省みてその缺點を救はねばならぬといふことになり、具體的にはヘーゲルの *an und für sich Sein* を *an und für uns Sein* とするところに純粹哲學と歴史哲學との根本問題を解決せねばならぬといふことになる。この意味で私は次にカント哲學の復興について考へて見たい。

(未完)